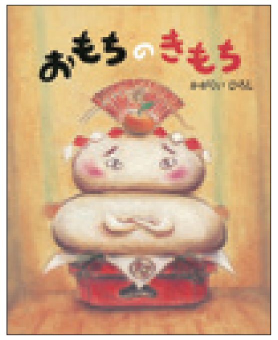
著作権保護コンテンツ

デビュー作品



『おもちのきもち』
1,650円(講談社／2005年12月)
たごさくさんの家の床の間に飾られていた鏡餅は、食べられるのがいやで、逃げだしました。走ったらおなかがすいてしまったので、自分のお餅をカポッと味見してみます。

冬休み前
小学校
1年生

今までお餅つきを、"お餅の視点"で見た子どもはなく(当たり前ですよね)、おはなしの展開に引き込まれるように聞いてくれます。お餅が逃げだす場面では、かたずをのむ子も。最後の場面で読み手が、「なんでこんな形になったかみんなは知っていますよね」と言うと、満足したかわいい笑顔が広がります。この本を冬休み前の1年生のおはなし会(テーマ：お餅)の定番にしています。
(京都府／こども図書室さん)

朝読の時間
小学校
高学年

いつ読んでも楽しい本なので季節は選びませんが、特に年末年始に、お正月の絵本と組み合わせて読むことが多いです。『おもちのきもち』というタイトルを言うとき、表紙の次にある中表紙の絵もゆっくり見せながら、主人公であるお餅の豊かな表情を子どもたちと一緒に味わいました。スピード感のあるページもあり、間が心地よい1冊なので、最後の「おしまい」を言うまで、集中力を切らさないよう気をつけました。
(茨城県／ロック好きのだるまさん)

かがくい作品の魅力

奇想天外で、子どもたちが知っている身近なものが多いこと。そして最後は、みんなの気持ちをあたたかくする力とユーモアと安心感があります。
(福島県／つるさん)

12月
まちづくりセンター
低学年

お餅が逃げていく様子に大笑い。オノマトペをマネる子もいました。また、かなり前に児童養護施設で小学生から中学生の幅広い年齢層のおはなし会でも読みました。年齢が高くても楽しんでくれていると感じました。
(静岡県／ほたるさん)

かがくいさんの思い出

「賞をとったら、原画展をやりましょう」と約束しました

かがくいさんとはじめてお会いしたのは、講談社の絵本新人賞の授賞式の会場でした。ロビーに飾られていた方々の原画を見ていると、『はっきよい畑場所』の絵が目に飛び込んできました。「これが佳作？ もったいない!!」と思ったのを覚えています。そのとき、「この方はいずれ賞をとって、きっとこの原画は絵本になる!」と確信しました。かがくいさんが同じ千葉県にお住まいと知り、同郷のよしみで勇気を出してご挨拶させていただきました。そのときに「絵本になったら原画展をやりましょう」と言っていました。

それから2年後、かがくいさんが『おもちのきもち』で新人賞をとったと聞き、さっそく100冊注文。そして約束だった原画展を2005年12月に開催しました。かがくいさんも一書店員の言ったことを覚えていてくださいました。

その後も編集担当者と一緒に何度か書店にお見えになり、そのたびにスケッチブックを広げて、「今、こんなのを描いているんだ」とニコニコしながらラフ画を見せてくださいました。忙しい書店業務の合間、お茶をしながらのひとときは至福でした。その後、私は新宿南店に移動してからも年賀状は出したりしていました。本当に大好きな作家さんでした。今でもかがくいさんのことを思い出すと涙がこぼれます。
(当時・紀伊國屋書店松戸伊勢丹店、現・流山おおたかの森店／K・Oさん)

『おむすびさんちのたうえのひ』
1,430円
(PHP研究所／2007年5月)
今日はおむすびさんちの田植えの日。しゃけさんや、たらこさん、おかかさんたちが手伝いに来てくれました。みんなでせっせのせ、せっせのせと、暗くなるまで田植えをします。

毎年4月の終わりごろ
小学校の学校図書館
5年生

田植えの体験学習授業の前に、読みきかせをします。高学年でも、本を取り出した瞬間に、ニコリとして、おはなしの世界に入ってきます。お米の大切さとともに、みんなで力を合わせることの大切さを味わい、ニコニコと、「お米ができたら、おにぎりにしよう」「私はのり巻き」と足取りも軽く田植えを始めます。
(埼玉県／ホーリーさん)

6月の朝読
小学校
3年生仲よしクラス

細かいセリフもひとつひとつ読んでいくと、どんどん集中して聞いてくれて、たこどん・いかどんの登場に「すげ〜」と感心して盛り上がっていました。
(岡山県／ひまわりさん)

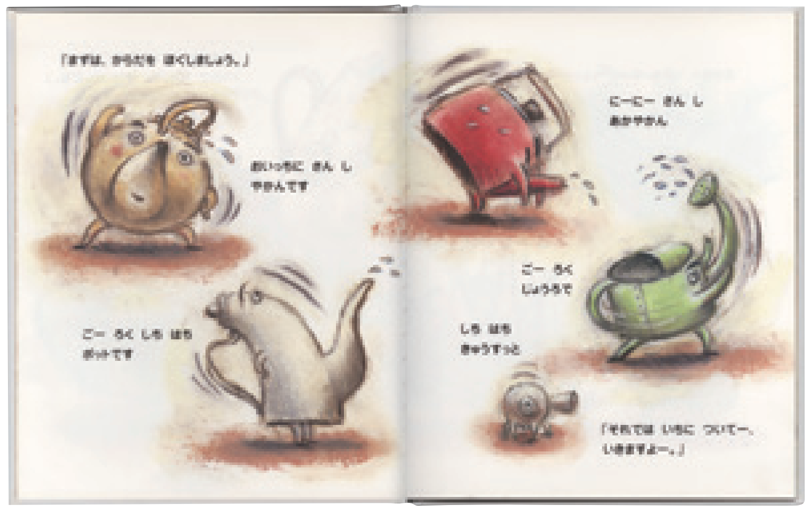
6月
小学校
1・2年生

環境月間の読みきかせでした。『水』をテーマに数冊選んだ導入に、この本を読みました。子どもたちは、キャラクターたちの謎(？)の行動に、「次は何が起きるんだろう？」と興味津々な様子でした。
(大分県／A・Kさん)

『もくもくやかん』
1,650円(講談社／2007年5月)
カンカン照りが続き、大地が干上がっていたある日、やかんやポット、ジョウロたちが集まってきました。大きく息を吸って、止めて、ためて、思いっきり吐きだした水蒸気は、雨雲になりました。

読みきかせポイント!

絵をしっかり見せながらも、テンポよく、それぞれのおはなしのキャラクターを意識して、リズミカルに、聞き手に呼びかけるように読んでいます。それから、聞き手が聞き取りやすいように、擬音の部分は特にはっきり読むように心がけています。
(埼玉県／ホーリーさん)



凡例
いつ
どこで
対象
読みきかせポイント!
かがくい作品をおはなし会で読んだJPIC読書アドバイザーのみなさんに そのときの様子や読みきかせのポイント、作品の魅力などを聞きました。

※JPIC読書アドバイザーについては、P59をご参照ください。

著作権保護コンテンツ

もう読んだ？ 新刊100!!

2023年6〜8月に発売された新刊絵本の中から、読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。

※出版社五十音順　※㊨は右開きの本。
マークは乳幼児から、㊥は中・高校生も楽しめる本です。

定期購読者限定プレゼント
新刊絵本プレゼントの詳細は、このページの下欄をご覧ください。

『わたしはかわいい マヌルネコ』
作／たけがみたえ
1,540円（あかね書房）

モンゴルの大草原を歩いている、もさもさしたネコは、世界でいちばん古くからいるネコで、マヌルネコというそうです。夕暮れと朝が好きで、運動は苦手だけれど、催眠術ができるとか、自分の秘密を話してくれます。

『ヨシ 3万7千キロをおよいだウミガメのはなし』
文／リン・コックス
絵／リチャード・ジョーンズ
訳／いわじょうよしひと
1,650円（あすなろ書房）

網にからまっていたのを助けられたアカウミガメは、「ヨシ」と名づけられました。水族館で20年間過ごしたあと、ヨシが海に帰る日がやってきました。3万7000km泳いで故郷に戻った奇跡のカメの実話です。

『アマガエルのうた』
作／谷口智則
1,650円（アリス館）

「あめあめふれふれ」とアマガエルが歌っていたら、何の役にも立たないと仲間たちから言われてしまいました。誰かが必要としてくれるのではと探しに行きますが、行く先々でいやがられてしまいます。

『イヌワシつかいのエルジャン』
文／イチンノロブ・ガンバートル
絵／バーサンスレン・ボロルマー
訳／津田紀子
1,760円（あかつき教育図書）

モンゴルのいちばん西に住むカザフと呼ばれる人々は、古くからイヌワシを使って狩りをしてきました。エルジャンは伝統文化を受け継ぐために、お父さんからいろいろなことを教わりながら、イヌワシと心を通わせていきます。

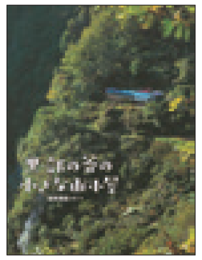
『アメツチクジラ』
作／宮田ともみ
1,650円（アリス館）

カイの大事な日、水族館に行く約束をしたのに、パパもママもお仕事だなんて。カイはエイッと地面を蹴飛ばしました。すると、アメツチクジラが現れてカイを地面の下の海へ。カイは宝石の海で大切なことを教えてもらいます。

『おてがみさがし』
作／おくはらゆめ
1,320円（あかね書房）

白いネコのふうちゃんから届いた手紙を、しましまネコのなっちゃんが広げてみると「さがして」の言葉と絵が描いてありました。絵に描かれたものを見つけるたびに、次の手紙があり、さがしものは続きます。

『黒部の谷の小さな山小屋』
写真・文／星野秀樹
1,760円（アリス館）
㊥



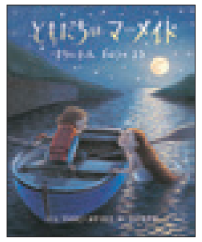
高い山にはさまれた黒部渓谷の谷底に建つ阿曽原温泉小屋は、大量の雪による被害を避けるため、冬の前にしまい、夏に建て直します。夏に向けて小屋に通じる山道の修理もしたら、たくさんの登山客がやってきました。

『ライオンとねずみ イソップねずみの イソップものがたり』
文・絵／しもかわらゆみ
1,430円（あかね書房）

子ネズミたちが、おはなし上手なイソップに、立派なネズミのおはなしをねだりました。「ライオンとねずみ」のおはなしを聞かせてもらった子ネズミたちは、「やったぁ！ ねずみ すごい!!」と大よろこびです。

※JPIC直販の定期購読の方に、抽選で新刊絵本100冊から1冊をプレゼントします。巻末のアンケートハガキまたはホームページのアンケートフォームから応募してください。

『ともだちはマーメイド まちにまった まほうの よる』
作・絵／ブライオニー・メイ・スミス
訳／ひびのさほ
1,650円（岩崎書店）



モリーの友だちメルはマーメイドです。今夜は月祭り。この月夜だけは魔法が起こり、メルも町を探検できます。ふたりは楽しい時間を過ごしますが、メルは月の光が消える前に海に戻らなければなりません。

『コブシメがやってきた！』
写真・文／高久 至
1,650円（アリス館）

体長最大50cm、コウイカ科のイカ類の中で最大級。エンペラというヒレを動かして泳ぐ姿はイカのようではありません。一瞬にして体の形や色を変える、まるで海の忍者のようです。コブシメの不思議な世界を見てみましょう！

『わたしたちをつなぐたび』
文／イリーナ・ブリヌル
絵／リチャード・ジョーンズ
訳／三辺律子
1,980円（WAVE出版）

女の子はお母さんと幸せな毎日を過ごしていましたが、自分がどこから来たのか知りたくなりました。コウノトリはリスから預かったと言い、リスはサケが運んできたと言い、最後のキツネはあるところに案内してくれました。

『くじらの ぶうぶう』
文／はらまさかず
絵／山本久美子
1,760円（イマジネイション・プラス）

クジラの子、ぶうぶうは魚たちと友だちになりたくて近づきますが、うまくいきません。やっと見つけた友だちは、実はプラスチックなのだとウミガメが教えてくれました。それでも一緒にいると、あたたかい気持ちになるのです。

『いじわるパグのブー』
作／アーロン・ブレイビー
訳／かいごれいこ
1,980円（潮出版社）

パグのブーはとっても意地悪で、一緒に暮らすダックスフントのトレバーに、いばり散らしてばかり。絶対おもちゃを貸してあげません。欲ばってひとりじめしていると、ほらほら、足元に気をつけて！

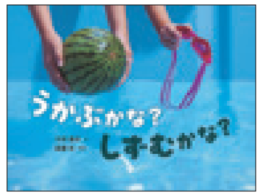
『ゴリラの おうさま』
文／ジューン・スモールズ
絵／しもかわらゆみ
訳／あまがいひろみ
1,870円（イマジネイション・プラス）

マウンテンゴリラは群れをつくって暮らします。オスのリーダーはとても大きく、とてもやさしく、白い背中をしているのでシルバーバックと呼ばれています。リーダーはときには命がけで家族を守ることもあるのです。

『ねこのゆめ』
作／荒井良二
1,760円（NHK出版）

家に住むネコ、街のネコ、ネコはいつも夢を見ます。まどろみながら、ふみふみしながら、向こう側には何があるかなと、あたたかい何かを夢見ています。会いたい誰かがきっといます。ネコは自由に夢を見ているのです。

『うかぶかな？ しずむかな？』
文／川村康文
写真／遠藤 宏
1,540円（岩崎書店）



水がいっぱいの容器にいろんなものを入れて、浮かぶか、沈むかの実験をしてみました。ボールは浮かんだけれど、粘土は沈みました。ビニール人形、カボチャとあれこれ浮かぶか試してみましょう。

『とおくのしんせきより ちかくのねこ』
作／広瀬克也
1,540円（絵本館）

「かい犬に手をかまれる」が「かいねこに手をなめられる」、「棚からぼたもち」は「棚からねこ」。なじみ深いことわざの一部を「ねこ」に置き換えると、あら不思議、ネコがいる幸せがあふれてきました。

『じっとみるの』
作／たちばなはるか
1,705円（岩崎書店）

ビー玉、ソーダ水、しゃぼん玉、ぷるぷるゼリー、じっと見ていたら透き通った世界に吸いこまれそうになります。しゃぼん玉に乗って雲の上まで行けたらどんな感じかしら？ パンの中、つぼみの中、石の中にも入れそうです。

著作権保護コンテンツ

JPIC × この本読んで！

第5回「親子で読んでほしい絵本大賞」

読者賞投票のご案内

司書、読みきかせボランティアなど、子どもに絵本を手渡す経験が豊富なJPIC読書アドバイザークラブ（略称JRAC）会員が、この1年間の本誌の「新刊100!!」で紹介した400冊から、「親子で読んでほしい絵本」を投票し、表彰する「親子で読んでほしい絵本大賞」。その「読者賞」は、読者のみなさんが投票によって選ぶ賞です。ぜひ、お気に入りの1冊にご投票ください！

「読者賞」受賞作品

※「読者賞」は第2回から創設。

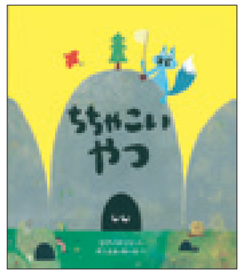
第3回

『しりとり』
作・絵／安野光雅
1,100円（福音館書店）

第4回

『戦争をやめた人たち 1914年のクリスマス休戦』
文・絵／鈴木まもる
1,650円（あすなろ書房）

第2回



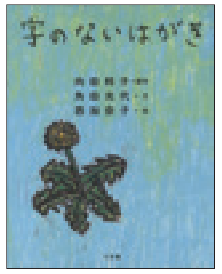
『ちちゃこいやつ』
作／ロブ・ハドソン
訳／ダニエル・カール
1,705円（マイクロマガジン社）

「大賞」受賞作品

第3回

『二平方メートルの世界で』
文／前田海音
絵／はたこうしろう
1,650円（小学館）

第1回



『字のないはがき』
原作／向田邦子
文／角田光代
絵／西 加奈子
1,650円（小学館）

第4回

『がっこうにまにあわない』
作／ザ・キャビンカンパニー
1,650円（あかね書房）

第2回

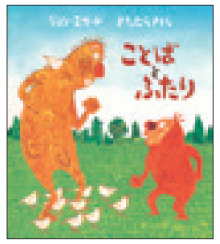
『あるヘラジカの物語』
原案／星野道夫
絵・文／鈴木まもる
1, 650円（あすなろ書房）

第5回「読者賞」候補12作品

夏87号

『てんてんきょうだい』
文／山田慶太
絵／田口麻由
1,320円（ポプラ社）

春86号



『ことばとふたり』
文／ジョン・エガード
絵・訳／きたむらさとし
1,760円（岩波書店）

冬89号

『お日さま おそい みんなも おそい』
文／フィリップ・C・ステッド
絵／エリン・E・ステッド　訳／金原瑞人
1,980円（発行：カクイチ研究所
発売：ぷねうま舎）

冬89号

『うみのたからもの』
作／たかおゆうこ
1,760円（講談社）

夏87号

『まよなかのゆうえんち』
作／ギデオン・ステラー
絵／マリアキアラ・ディ・ジョルジョ
1,760円（ＢＬ出版）

春86号

『たびする木馬』
作／牡丹靖佳
1,760円（アリス館）

秋88号

『おふろおじゃまします』
作／たしろちさと
1,650円（文溪堂）

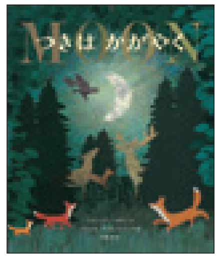
秋88号

『おきにいりのしろいドレスをきてレストランにいきました』
作／渡辺 朋　絵／高畠那生
1,650円（童心社）

春86号

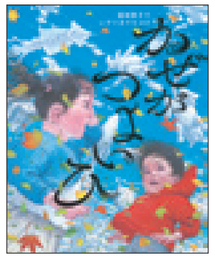
『ゆきのげきじょう』
作／荒井良二
1,760円（小学館）

冬89号



『つきは かがやく』
文／パトリシア・ヘガティ
絵／ブリッタ・テッケントラップ
訳／木坂 涼
1,980円（ひさかたチャイルド）

秋88号



『かぜがつよいひ』
作／昼田弥子
絵／シゲリカツヒコ
1,540円（くもん出版）

冬89号

『おばあちゃんのにわ』
文／ジョーダン・スコット
絵／シドニー・スミス
訳／原田 勝
1,760円（偕成社）

投票方法

投票フォームは
こちら▼

本誌2023年春（86）号～冬（89）号で紹介した新刊400冊から編集部が厳選した、候補12作品の中から、「親子で読んでほしい」というテーマにいちばん合うと思う3冊を選んでください。選んだ理由（100文字程度）も添えてください。

▼投票フォーム URL
https://forms.gle/TeFDUqMUAcotQvDq9

応募資格　「この本 読んで！」読者なら、どなたでも！※おひとりさま1回の投票に限らせていただきます。

投票期間　2023年12月1日（金）～2024年1月8日（月・祝）

大賞と読者賞の発表は、2024年春号（3月5日発売予定）誌上にて！

1～3月のプログラム

著作権保護コンテンツ

対象別おはなし会のプログラムです。
ここで紹介する絵本や紙芝居は、
ご家庭での読みきかせにもおすすめです。
ブックガイドとしてもご活用ください。

行事絵本・季節の絵本

干支

『龍』

文／今江祥智　絵／田島征三
1,430円（BL出版）
山をふた巻きするほど大きくて、雲を呼び風を起こし天を駆けることもできるのに、龍の子三太郎は沼の底でじっとしているだけでした。

正月

『はつゆめはひみつ』

文／谷 真介　絵／赤坂三好
1,175円（佼成出版社）
昔から、夢には何かを知らせる力があると言われています。特に初夢は、誰にも話さなければ、それが叶うと信じられていました。

卒園・友だち

『ぼくたちの きせき』

作／中川ひろたか　絵／あずみ虫
1,540円（鈴木出版）
広い宇宙の同じ場所で、同じとき、ぼくたちが生まれ育ち、出会って、そして友だちになったことは奇跡です。

紙芝居

『たきび たきび ぽっかぽか』

脚本／よこみちけいこ　絵／石川えりこ
1,540円（童心社）
寒い朝、キツネのきょうだいは、おじいさんが焚き火をしているのを見つけました。あたたかそうな焚き火にあたりたいなあ～。

紙芝居

『くいしんぼうのまんまるおに』

脚本・絵／松井エイコ
1,760円（童心社）
むらさき色、みどり色、オレンジ色の、まんまる鬼がいました。食いしんぼうの3人は「おいしいものが食べたいよー」と言っています。

（安冨ゆかり）

プログラム（各10～15分）小学校低学年

1月　テーマ：年の始めのお正月

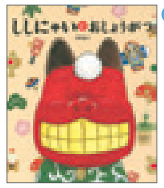
❶『どんぶら どんぶら 七福神』

作／みきつきみ　画／柳原良平
1,100円（こぐま社）
数え歌で恵比寿・大黒天・毘沙門天・弁才天・布袋・福禄寿・寿老人と、福を届けにさあ出発！

❷『いろはのかるた奉行』

作・絵／長谷川義史
1,980円（講談社）
江戸時代にできた「いろはカルタ」。その横に書かれた作者のことわざが、とにかく笑えます。

❸『ししにゃいとおしょうがつ』



作／澤野秋文
1,320円（世界文化社）
ネコが獅子舞にばけて、「ししにゃい」として、みんなと楽しくお正月を過ごします。

2月　テーマ：いろいろな鬼たちの物語

❶『せつぶんのひのおにいっか』

作／青山友美
1,650円（講談社）
鬼一家はこっそり人間の家に住んでいます。「明日は節分」と聞いた鬼一家に事件が起こりました。節分の日に秘密がわかります。

❷『まゆとおに』

文／富安陽子　絵／降矢なな
1,100円（福音館書店）
やまんばの娘、まゆを食べようとした鬼も、まゆにはかなわないとわかり、ふたりは仲よしに。

3月　テーマ：春がまちどおしいね！

❶『はるですよ ふくろうおばさん』

作／長 新太
1,760円（講談社）
寒がり屋のフクロウが、毛糸で大きな袋を編んで、森全体にかぶせました。春になって動物たちは暑くて逃げだします。

❷『一年生に なるんだもん』

文／角野栄子　絵／大島妙子
1,430円（文化出版局）
１年生になるための準備でワクワクドキドキのさっちゃん。春になるのが楽しみになります。

❸『ほわほわ さくら』

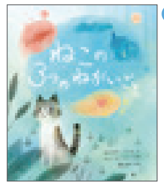
作／ひがしなおこ　絵／きうちたつろう
880円（くもん出版）
桜の花びらが風に乗って舞い降りていく様子が、まるで歌を歌っているかのよう。

（鶴見美佐子）

プログラム（各10～15分）小学校中学年

1月　テーマ：ねこ年があったなら

❶『ねこの3つのねがいごと』



文／カリスタ・ブリル　絵／ケナード・パーク
訳／横山和江　1,540円（岩崎書店）
自然の音が、たくさんちりばめられています。ネコの目線で、ネコの進む道を、音を取り入れながらたどっていくと、願いがかなうかも。

❷『なまえのないねこ』

文／竹下文子　絵／町田尚子
1,650円（小峰書店）
名前があることへの憧れや名前を探し回るせつなさ、女の子と出会ったときのほっとした喜びを届けましょう。すてきな見返しも大切に。

❸『にゃーご』

作・絵／宮西達也
1,430円（鈴木出版）
先入観がないと、こんなすてきな出会いも。「にゃーご」という言葉がカギになります。場面、場面で変化を持たせ、テンポよく。

2月　テーマ：あったか毛糸

❶『しずかに あみもの させてくれー！』

作／ベラ・ブロスゴル　訳／おびかゆうこ
1,650円（ほるぷ出版）
家出をしたおばあさんのたどる道がおもしろいです。繰り返し出てくるタイトルを一緒に読みあい、絵の中の空間を味わいましょう。

❷『あかいてぶくろ』

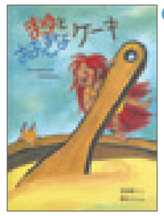
文／林 木林　絵／岡田千晶
1,760円（小峰書店）
離れ離れになった手袋が、それぞれの幸せの形を教えてくれます。絵の雰囲気に合わせ、リラックスして、ゆったりと。

3月　テーマ：春の訪れ 春の味

❶『めざめのもりのいちだいじ』

作／ふくざわゆみこ
1,320円（福音館書店）
どきどき、そわそわ、びくびくのあとに訪れる、ほっとしたあたたかな気持ち。季節の移り変わりや春の目覚めを味わいましょう。

❷『まゆとおおきなケーキ』



文／富安陽子　絵／降矢なな
1,100円（福音館書店）
元気なまゆが、大きな木鉢を抱え、谷へ、川へ、山へと走り回ります。スピード感を持って読むと、春の眠い目もパッチリです。

（増田穂里）

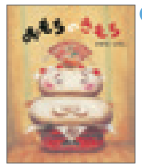
プログラム（各10～15分）小学校高学年

1月　テーマ：一年のはじまり

❶『どんぶら どんぶら 七福神』

作／みきつきみ　画／柳原良平
1,100円（こぐま社）
初詣で目にする七福神は福をもたらす神さまです。リズミカルな文と親しみやすい姿が心をつかみます。

❷『おもちのきもち』



作／かがくいひろし
1,650円（講談社）
床の間から鏡餅が脱走。その豊かな表情と展開に、知らないうちに誰もが笑顔になってしまいます。

❸『落語絵本 はつてんじん』

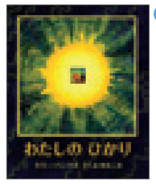
作／川端 誠
1,760円（クレヨンハウス）
新年、天満宮を参拝した息子と父親の軽快なやりとりをテンポよく。目と耳で楽しみましょう。

2月　テーマ：地球に暮らす

❶『いっぽんの木のそばで』

作／G.ブライアン・カラス　訳／いしづちひろ
品切れ中（BL出版）
あるどんぐりが、200年もの時を経て立派なオークの木となり、一生を終えるおはなし。雷に打たれる場面は余韻を大切に。

❷『わたしの ひかり』



作／モリー・バング　訳／さくまゆみこ
1,540円（評論社）
さまざまな方法で生みだされる電気ですが、もとは太陽から生まれています。すべてのエネルギーに長所と短所があることも補足して。

3月　テーマ：門出の季節に

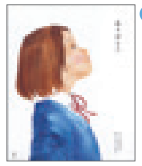
❶『丘のうえの いっぽんの木に』

作／今森光彦
1,540円（童心社）
エノキの木とオオムラサキをはじめとする生きものの一年が、切り絵で表現されています。モノクロで遠目がききます。

❷『からす たろう』

文・絵／やしまたろう
1,980円（偕成社）
約100年前の学校が舞台。絵と言葉に普遍的な力があり、印象に残る1冊になることでしょう。

❸『ありがとう』



詩／谷川俊太郎　絵／えがしらみちこ
1,650円（講談社）
素直な気持ちを口に出すことが難しい年ごろですが、卒業式では自然と感謝の言葉が浮かびます。最後の場面は思いをこめて。

（古市未央）

※当財団（JPIC）では読書を通して国民の生涯学習推進・読書活動推進のために、1993年より「JPIC読書アドバイザー養成講座」を開設。読書や出版について体系的に学習する講座です。
JPIC読書アドバイザークラブ（JRAC）とはこの講座の修了生の有志により自主活動しているクラブ。全国に約660名が在籍、地域のおはなし会などで活躍しています。

著作権保護コンテンツ

第14回

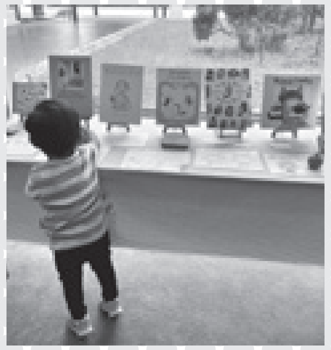
保育者のたまごたちと絵本

絵本の力を子どもたちに伝えていく保育者を育てたい

保育現場の先生たちは、養成校で絵本についてどのように学んできたのでしょうか。和光大学の事例を山口理沙さんに2回にわたって伺います。

取材・文／荒木晶子

来場者にも参加してもらった掲示物。


以前の教え子も、お子さんと一緒に展示を見に来てくれました。

絵本の内容に合わせて、ウサギやカボチャ型のPOPにした学生も。

保育コースの約4割を男子学生が占めるのが特徴

和光大学は、東京都町田市にある4年制大学です。小高い丘の上にあり、学生たちが敷地内で流しそうめんや焚き火を楽しんだりできるような、自由な校風です。

私が担当する現代人間学部心理教育学科子ども教育専修保育コースには、1～4年生の146名の学生が在籍しています。そのうち4割程度を男子学生が占めている点が、他の保育者養成校と異なる特徴的なところです。

取り上げた絵本についてまとめるノートを課題に

私は、保育者を育てる仕事に12年間携わってきて、今年度より本学で「幼児教育学演習」「保育原理」「子どもとことば」や実習指導を担当しています。

特に「子どもとことば」については、自分の専門が教育哲学なので、もともと言葉を大切にしながら授業をしたいという考えがあったことと、私が信じている絵本の力を子どもたちに伝えていく保育者を育てていきたいという思いがあります。

この授業は、1年生の入学時から半期行いました。「言葉とは何か」「子どもが言葉を獲得するとはどのようなことなのか」を考えることから始め、保育者はどのように子どもの言葉の育ちを援助できるのか、その役割について考える上で、実際に絵本や紙芝居などを使って学びを進めました。

毎週の授業では「ファンタジー」「生活に根ざしたもの」などとテーマを決めて、学生同士で絵本の読みきかせをしあいました。取り上げた絵本については、「子どもの遊び」などの絵本のジャンルや作者名、出版年、対象年齢と各年齢の発達に応じた読みきかせのポイントなどを小さなノートにまとめるという課題を出しました。実は、私は米国の大学に進学し、児童文学を学んでいたとき、同じようにノートをつくっていました。そのノートは自分の財産となり、今も手元にあっていろいろな面で役に立っています。学生たちにとっても、保育者となったときにヒントをくれるはずだと思い、半期で100冊をめざして取り組みました。そのような積み重ねていく課題を大事にしたいと思っています。

山口理沙
やまぐち・りさ

和光大学現代人間学部心理教育学科講師。専門研究分野は教育思想・幼児教育学。米国で心理学や社会学を学んだのち帰国、教育学を志す。聖セシリア女子短期大学准教授、洗足子ども短期大学専任講師などを経て2023年より現職。

学生が描いたおすすめ絵本のPOPを図書館で展示

大学の近隣に幼稚園がないため、実際に子どもたちに絵本を読む機会はありません。そこで、学生たちそれぞれのおすすめの絵本を紹介するPOPを描いてもらい、6月に本学付属図書館の特別室で展示することにしました。学生たちには、新しい先生として保育園や幼稚園に赴任したときには、自己紹介の一環として自分の大好きな絵本を紹介することもあるので、そのつもりで描くように話しました。

また、内容が全部わかってしまうとつまらないので、その絵本を読みたいと思えるようなイラストと文を考えて描くように指導しました。同じ絵本を取り上げる学生がいてもいいと思っていたのですが、結果はすべて異なる絵本のPOPができあがりました。

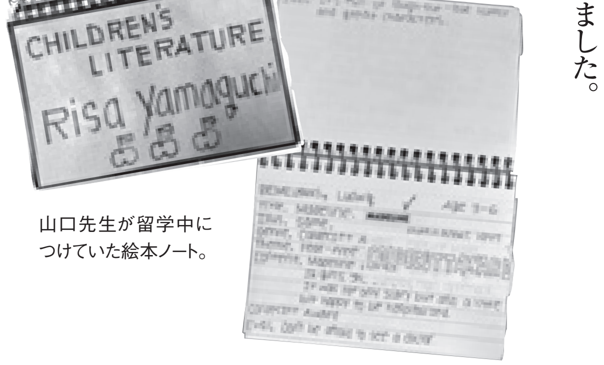
図書館で展示したのは、本学は総合大学で保育について知らない他学部の学生や教職員も多く在籍しているため、その人たちにも絵本というものに触れてもらえたらと思ったからです。学生が描いたPOPをテーブルに置き、その後ろに実際に手にとって見ていただけるよう、絵本の実物を表紙が見える形で展示しました。本学は自由な校風を反映して門がなく、近隣の方も気軽に図書館を利用することができます。数は少ないですがそうした近隣の方や、ちょうどオープンキャンパスの時期でもあったので、保育を志す高校生とその親御さんにも見ていただくことができました。

絵本はどんな人の心にも残る愛されるメディアと再認識

展示に際しては、何人ぐらいの方に来ていただけたかの調査も兼ね、来場者にも自分の好きな絵本を紹介してもらおうと考えました。洗濯ロープに見立てた模造紙を壁に貼り、洗濯ものをかたどった紙片を用意して、好きな絵本を書いて貼ってもらうようにしたのです。すると、たくさんの絵本が挙がりました。

この調査をしてみて思ったのは、小さいころに読んでもらったり、大好きだった絵本は、保育に携わる人だけでなく、一般の人の心にも原体験としてずっと残っているのだな、ということです。絵本は、本当に愛されるメディアなのだと再確認でき、私自身、とても勉強になりました。

学内での展示は盛況のうちに2週間で終わりましたが、それで終わりではもったいないと思いました。そこで、近隣の公立図書館で展示ができないかお願いしてみたところ、来年3月に展示を検討していただけることになりました。



山口先生が留学中につけていた絵本ノート。

次回は絵本作家さんを招いた特別授業について、お話を伺います。

著作権保護コンテンツ

すべての子どもたちに笑顔を

第12回

支援の必要な子と絵本

新型コロナウイルス感染症と、それに伴う社会の変化は、集団生活をする子どもたちの日常にも大きな影響を及ぼしたといわれています。発達支援の現場ではどうだったのでしょう。「清瀬市子どもの発達支援・交流センター とことこ」（東京都）のセンター長・岩澤寿美子さんに伺いました。

取材・文／小山まゆみ

岩澤寿美子 いわさわ・すみこ
公認心理師、臨床発達心理士、精神保健福祉士。東京都清瀬市子どもの発達支援・交流センター とことこセンター長。保護者や子どもへの相談・療育指導のほか、幼保園・小中学校への巡回指導なども行っている。

集団生活に戻るのがしんどい子も

保育園や幼稚園、学校での生活に関しては、コロナ禍で休園・休校になり、お友だちに会えない、一緒に遊べないなど、さまざまな影響があったと報道などでも伝えられました。

けれども、集団生活に適応しにくいお子さんや、対人関係が不得意なお子さんのなかには、休校でちょっとほっとしたお子さんもいたようです。コロナ禍では、学校に行かなくても、オンラインで授業を受けることができるようになりました。画面越しではあるものの、お友だちと会うこともできます。

一部のお子さんにとって、オンラインという選択肢が増えたことは、ストレスが軽減される要因だったのでしょう。これはご家族にとっても同じで、コロナによりもたらされた、ひとつのメリットだったといえるのかもしれません。コロナで学校が休校しているのだから、行かなくていいという安心感。親御さんも行き渋りをするお子さんに、「明日はどうするの？」と聞く必要がありません。

ところが、学校が再開すると、学校は〝行くべき場所〟に戻りました。それまではオンラインという選択肢があったのに、以前に逆戻りです。

今まできていたのに、なぜ？　そんな思いを持つお子さんや、折り合いをつけるのが難しかったお子さんも少なからずいただろうと思います。

親子で過ごす時間が増えたことはメリット

夏休みや冬休みなど長期の休み明けや、学年が変わる春休み明けにも、「家では元気に過ごしているのに、学校に行きたがらない」という親御さんからの相談が増える傾向にあります。

緊急事態宣言解除後に学校が再開した際も、それと同じようでした。学校が再開して、いざ集団の中に戻るとなったとき、家で元気だったお子さんが学校に行きたがらない。

「あれ？　どうしてうちの子は学校に戻れないのだろう」「いやがるようになったのはなぜ？」。そんな親御さんからの相談が数多くありました。

一方、「清瀬市子どもの発達支援・交流センター とことこ」に通所しているご家庭の中には、集団生活から離れて、家で過ごす時間が多くなったことで、親子のコミュニケーションが密になったという方もいらっしゃいました。

親御さんの働き方にも選択肢が生まれ、お子さんと一緒におやつをつくったり、人の少ない公園で遊んだり、これまでより親子の時間を楽しむことができたのも、コロナによるメリットだったのかもしれません。

コロナをきっかけにあらためて感じた絵本への誤解

コロナ禍ではおうち時間が増えたことで、読書の機会に恵まれたという方も多かったようです。「とことこ」では、お子さんと一緒に絵本を楽しんだという声はあまり聞かれなかったのですが、それには絵本に対する誤解があるような気がしています。

コロナ禍に限ったことではありませんが、小学生の保護者の方にとって、文字が少なく、絵がたくさんある絵本は、「小さい子が読むもの」と思われているところが多々見受けられます。

イラスト／アンヴィル奈宝子

絵本を読みきかせしてもらうのは、大人になっても心地よいものです。しかし、親御さんとしては「文字が読めるのだから、ひとりで読みなさい」と言ってしまいがちです。「字が読めるようになったら、絵のついている本ではなくて、字だけの本にしなさい」と言いたくなる方もいるでしょう。

最近では、子どもの絵本コーナーだけでなく、大人向けの絵本コーナーを設けている書店もあります。ところが、小・中学生向けと打ち出された絵本コーナーはあまり見かけません。そういったことからも、小・中学生の親御さんにとって、絵本を読書のひとつとしてとらえることは想定外だと思うのです。

親子で一緒に楽しみ、三次元の活動につなげる

文字や文章に抵抗のあるお子さんのなかには、ストーリー性のある絵本より、図鑑などを好むケースがよくあります。就学前くらいの小さいお子さんですと、親御さんも一緒に図鑑をのぞいて、「これは何？」「クワガタだよ」、「これは何？」「ティラノサウルスよ」などとやりとりして、親子で楽しむ機会があります。

ところが、小学生くらいになると、一緒に図鑑を見るということが少なくなってきます。お子さんがひとりで図鑑を見ていても、親御さんとしては読書をしている、とは思わないのかもしれませんね。

絵本ではなく、漫画や本でもそうですが、お子さんが5冊読んだら、1冊でもかまいません。親御さん自身もお子さんが興味を持った本を読み、お子さんと感想を言い合うのはとても大事です。これは、「とことこ」にいらしている親御さんにもよくお伝えしています。

そうすることによって、お子さん自身も自分とは違う感想があることに気づくことができます。同じ本を読んでも、お父さん・お母さんと、ぼく・私は違うんだ、という発見にもなります。感想が違ってもいいんだ、いろいろな考えがあるんだと感じてもらえる、ひとつのきっかけになるわけですね。

生活はコロナ前に戻りつつありますが、親子で過ごす時間はどうぞ大切にしてください。そして、お子さんがひとりで図鑑を黙々と見ていたら、親御さんも一緒に楽しんでほしいと思います。恐竜の図鑑が好きなお子さんなら、お休みの日は一緒に恐竜博物館へ。昆虫が好きなお子さんなら、虫探しへ。二次元で楽しんだことを、三次元の活動につなげていく。そんな働きかけなら、親御さんにも取り組みやすいのではないでしょうか。